名詞転換語法と K. Daniels による研究

荒　木　泰

現代ドイツ語に現れている諸現象中，最も顕著な特徴として見逃すことの出来ない名詞化傾向一般については，既に独仏文学研究[1] の小稿で概観したが，ドイツでも，この言語現象に対する本格的な研究が開始された。その第一陣として，1963 年に出版された Karl-Heinz Daniels による "Substantivierungstendenzen in der deutschen Gegenwartssprache"（現代ドイツ語の名詞化傾向）がある。この言語現象は従来多くのドイツ語研究者の注目を集めながら，その対象が生きて流動する現代語だけに，未だ研究の端緒さえ捕えられていなかった。その先鞭をつける Daniels の研究は，三つの Abteilung から成る叢書 "Sprache und Gemeinschaft" の Grundlegung, Studien, Darstellung のうち，Abteilung Studien の一つをなす研究論文である。この叢書は，近年日本のドイツ語学界でも，その言語研究の新理論が俄かに注目され始めた Leo Weisgerber 教授が編さんするものである。従って彼の理論が，具体的な言語現象を対象とした実践的研究の上で，どの様な方法と結論を示すかが，名詞化傾向そのものを別としても，極めて興味あるところである。著者個人については未だ詳細は知られていないが，同書の VORBEMERKUNG によると，1956年に Deutsche Forschungsgemeinschaft の委託により，その資金援助を受けつつ研究が始められ，テーマ設定や編集は L. Weisgerber, H. Brinkmann の指導を受け，多くの共同作業者の協力によって生れた，と

ある。

さて本書の標題「現代ドイツ語の名詞化傾向」には，副題 Nominaler Ausbau des verbalen Denkkreis（動詞的観念領域の名詞的構成）が添えられてあり，主副両題とも指向するところは名詞化現象全般である筈である。しかるに内容は nominale Umschreibung（名詞転換語法）[2] と著書の名付ける形体のみに研究対象を絞っている。即ち，元来名詞化傾向には大別して二つの分野があり，一つは例えば nach Erhalt unseres Briefs を nachdem (od. wenn) Sie unseren Brief erhalten [haben] の短縮と観る文章論的分野と，berichten の代りに Bericht erstatten の如く，造語論的な面を持つ分野とである。Daniels の研究が後者を対象として限定しているのは，Weisgerber——Brinkmann 理論の実践者として，所謂 energetisch な言語観察[3] を言語現象研究の根本理念としているところから考えると，容易に首肯出来るのである。METHODISCHE VORBEMERKUNGEN の項の冒頭に掲げてある Weisgerber の引用によれば，言語研究は四つの領域の各々から問題を得なければならない，として die lautliche Form, der inhaltliche Aufbau, die geistige Leistung, die gestaltende Wirkung という vir Bereiche を挙げている。Daniels の研究も従ってこの原則に基いているが，ここでは従来の Wortbildung や Syntax の概念が極めて狭義の内容しか持っていない様に見える程，著しく拡大された用い方をされている。nominale Umschreibung は Wortbildung と Syntax の両分野に属する，というのがこの研究の立場になっており，この様な独特の中間性こそが，名詞と動詞の中間性と相俟って，現代語展開の主要部分に種々の解明を与えてくれるとしている。名詞化傾向一般は，名詞転換語法の中に，その主要な特徴の殆んどを含んでおり，その解明が同時に名詞化傾向全般の解明であるという設定が，この書の題

名に象徴されていると見ることが出来よう。

名詞化傾向をとり上げて，文体批評的な考察を行うことは，これ迄も多くの人々によってなされて来た。その大部分は，ことさらに悪例のみを挙げて嘲笑し，国語浄化のために憤るという，専ら否定的な立場であった。

このことは様々の著書によって様々に名付けられた名詞化傾向の貶称を並べてみると容易に看取される。unechte Zeitwort (G. Storz 以下括弧内は著者名), Streckverben (L. Reiners), schwülstige Umschreibungen (P. Grunow), aufgeblähte Wendungen (J. A. Schmitt), Larvenform des Zeitwortes (W. E. Süskind), Abklatschwörter (F. Herrmann), Sprachbeulen (F. C. Weiskopf), Zeitwortattrappen (K. Hirschbold), sprachliche Wassersuppen (E. Engel), steifleinene Gewandstücke (Th. Matthias), Verbalsurrogaten (Wustmann), Verbalhypertrophien (K. Korn), Fertigware (M. Lichnowski), 或は夫々動詞の Redekitt (L. Reiners), nominale Aufpolsterung (Sternberger-Storz-Süskind, Aus dem Wörterbuch des Unmenschen), Quetschung (K. Häfner), Zerdehnung (Th. Matthias), Streckung (L. Reiners), Spreizung (A. Kuemmel), Aufblähung (Wustmann), Montage (J. Rausch) であるといわれ，更にその結果は Verhauptwortung (L. Mackensen), Hauptwörtersprache (F. E. May), Hauptwörtlichkeit (H. Becker), Hauptwörterkrankheit (Stilduden 及び Th. Matthias), Hauptwörterei, Hauptwörterseuche (L. Reiners), Hauptwortsucht (B.Betcke), Dingwortseuche (G. Ruseler 及び O. Schreiter), Umschreibungssucht (W. M. Esser), Verbalaufschwemmung (K. Korn), Verbaphobie (M. Lichnowski), Substantivomanie (A. Zelle), Versinterung der

Sprache (B. V. Münchhausen)

この様に列挙してみると，名詞化傾向が如何に屢々口を極めて警告され続けて来たか，それにもかかわらず，益々発達の一路を辿ったかが窺える。この様な語法に対する警告は，既に Luther において見られ，Leipzig 時代の Goethe も zu Ende gebracht の代りに geendigt と書くべきだ，と妹に書き送っているという。

それ故，特に現代の現象であるとして扱うのは当らないし，又批評家は，特別目立つ実例ばかりを並べて非難する傾向がある。しかし，この語法の持つ正当な働きの方を忘れてはならない。或る何等かの言語現象が過度に前面に現われる時にこそ，その当初は肯定的な面にある筈の原因を考えてみなければならない。しかるに，個々の例を切り離して観察していたのでは決して与えられないような見通しを得るため，資料を出来る丈完全に集めるという試みは未だなされたことがなかったのである。かくして，この研究が先づ資料の蒐集に膨大なエネルギーを費したのは当然のことである。その際，あらゆる言語の分野を網羅して，出来る限り代表的な断面図を得ようとした，とあるが，掲げてある資料の出典は次のようなものである。

a) *Wörterbücher* von Adelung, Heinsius, Grimm, Sanders, Heyne, H. Paul, Trübner, Mackensen.

b) *Grammatische Darstellungen* von Grimm, Wilmanns, Behaghel, Sütterlin, H. Paul, Ingerid Dal.

c) *Schriftsteller*. G. Hauptmann, W. Bonsels, Th. Mann, H. v. Hofmannsthal, F. Kafka, J. Roth, B. Brecht, R. Schinkele, D. v. Liliencron, E. Schaper, H. Hesse, E. Jünger, W. Bergengruen

作家により，又描写の対象により，収穫は異ったが，以上の作家からは比較的多くの名詞転換語法を見つけ出すことが出来たという。

一方少なかった方の作家は

R. Huch, M. Hausmann, E. Wiechert, R. Bindung, R.Dehmel

古い作家の中から選んだのは

Lessing, Goethe, Schiller, Campe, Kleist

ところが，ここから驚くべき結果が出じた。

名詞転換語法の率が，これらの作家では平均して現代作家に劣らず，大ていは寧ろ率が高くさえあることが発見されたのである。

d) *Wissenschaftliche Werke* verschiedener Gebiete: Philosophie, Sprach- und Literaturwissenschaft, Geschichte, Medizin, Rechtswissenschaft.

e) その他，法律原典，布告文，使用説明書，広告，料理書，新聞

口述のものとして，講演，講義，説教，ニュース

以上の資料から約四千種の名詞転換語法が集められたが，しかし到底完全さは望むことが出来なかったとしている。何故ならば，或る種の動詞は「開放的な」型を造り，先例が次の例を生んで次々と増え留まるところを知らないからである。

次に資料は音韻形態によって整理されるが，先づ動詞別のグループに分類し，次に内容の差によって更に小分類している。例えば同じく halten によるものでも，Vorlesung halten, Abstand halten, Takt halten, Umschau halten は夫々 halten の意味内容に相違があるからである。以下 abgeben から zuziehen まで，アルファベート順に 264 種の動詞別分類が37ページに亘り収めてある。

先述四千の例がすべて掲載されているわけではなく，類例の極めて多いもの，「開放的文型」の場合などは usw で以下省略してあるのは，外国の研究者にとって如何にも残念であるが，一応辞書代りに座右に置いて甚だ重宝する一覧である。外国のドイツ語研究者としては，更に名詞別分類の一覧が添えられて，小さな辞典の様な形で，この部分だけ出版されたな

らば，大いに利益をうけることが期待される。

この分類表を見て明らかになることは，一つの動詞が，恰も同音の後綴の如き派生手段の役割を音韻的に果している様に見える。しかもその際，同じ動詞でも，その従う名詞によって種々異った内容を示すのである。これは嘗てドイツ語が，根幹動詞から前綴によって多くの派生動詞，即ち現今の所謂，分離動詞や不分離動詞を造り出したのと，行き方では似た点がある。この点を Daniels は次の様に述べている。「全体的に見て言えることは，ドイツ語の動詞的観念領域の構成が，必ずしも必要な方法で行われていないということである。われわれの研究の主目標は，ドイツ語の名詞転換語法が，動詞体系の欠陥と間隙を埋めて様々な方法で入り込んでいることを立証することにある。その欠如するものは動詞後綴であるか，相添加綴 (Aspektformantien) であるか，或は動作態様の標識であるかもしれない。或は又動詞語彙その他の不充分な構成であるかもしれないが，それ等を補っているのである。ドイツ語の名詞転換語法によって，動詞的観念領域は豊富にされ，拡大され，それ故，動詞的観念領域の名詞的構成という言い方が出来るようになっていることが明らかにされねばならない」(S. 32)

この観点から，Haupteil は INHALTLICHE ORDNUNG UND GEISTIGE LEISTUNG (内容別配列と精神面の働き) と題され，この論文の中心をなしている。資料蒐集と動詞別分類は従って本論に入るための Vorstufe である。

動詞によって分類されたグループの内部で，多くの場合，種々の Nische が区別され得る。この Nische という新しい言語学術語は最初 K. Baldinger が意味論 (Semantik) 上で用いるために造り，後に Weisgerber が Wortnische に発展させた概念である。従ってこの論文にも屢々用い

られているが，形態上同じ派生手段（例えば前綴や後綴）によって作られている派生語群の中で，内容的に他より密接に関連し合う集団を表している。名詞転換語法を一種の派生手段と見る時，例えば begehen による派生表現中，Verbrechen begehen と Fest begehen とは当然別の Nische に属するし， eine Feier——Zeremonie——einen Brauch——den Geburtstag——ein Jubiläum begehen は，ein Fest begehen と同じ Nische に属するわけである。

本書では内容別配列が八章に分けられ， 各章が A. Die inhaltliche Gliederung（内容別区分）と B. Die geistige Leistung の二つの観点から成っている。これ等八章は即ち大きな Nische であり，更にその中の小区分が小さな Nische と見ることが出来るが，その八つの章とは，

1. Die Befindlichkeit eines Subjekts wird dargestellt.
   (z. B. in Bewegung sein)
2. Das Subjekt ist in seinem Verhalten gesehen.
   (Fähigkeit zeigen)
3. Das Subjekt ist in seinem gegenwärtigen Tun gesehen.
   (eine Bewegung machen)
4. Das Tun des Subjekts ist einem Gegenüber zugewendet.
   (jm. einen Besuch machen)
5. Menschliches Tun in vorgegebenem Rahmen
   (Einfluß ausüben)
6. Das Subjekt als Urheber
   (Ordnung schaffen)
7. Das Gegenüber wird in seinem Tun bestimmt
   (in Bewegung bringen)
8. Das Gegenüber wird verändert……Passiv-Ersatz……
   (in Gebrauch kommen)

著者によると，「同じ事象 (Vorgang) の動詞的表現様式と名詞的表現

様式との内容的相違を規定することこそ，われわれの研究の主な課題である。」そこで各々の Nische の中で，例えば sich bewegen, fließen, umlaufen, vor-und zurückmarschieren, ruhen 等の単動詞と，in Bewegung——in Fluß——in Umlauf——im Vormarsch——im Rückmarsch——in Ruhe—— SEIN

との間に，どの様な差があるかが，厳密に考察されている。この例では，前者が瞬間的な個々の行為に重点を置いた意味を持つに対し，後者の名詞転換語法では，運動や行動がその瞬間を超えて存立する状態と見られているのである。

一方では動詞の持つ機能の分析も重要な問題である。Brinkmann によれば，「名詞は有 (Sein) の世界で人間にとって存在する領域において秩序を造り，動詞は生起・成就を表現する」のであるが，名詞転換語法では，名詞が行為内容の実質的な担い手となってしまっている。それにもかかわらず，この根原的相違に基く役割の分担は厳として存在している。名詞転換語法中の動詞の役割は，名詞中に述べられた行為内容を作動させることであり，成就の様態をより詳しく規定し，実現の様態と段階を区別することである。動詞には，行為の時称関係を表わす文素 (Satzmorphem) がすべて残ったままである。名詞には従って行為内容のみがそのままとり出されているが，屈折する動詞に残されている叙述力は含まれていないのである。Brinkmann の近著 "Die deutsche Sprache; Gestalt und Leistung" の中では，動詞の「内容価 (Inhaltswert)」と「文章価 (Satzwert)」を区別しているが，名詞転換語法では，この二つの機能が確然と分かれている。即ち内容価は名詞に，文章価は人称形を持つ動詞に属するわけである。

今，in Bewegung——sein, kommen, geraten, bleiben, halten,

bringen, (sich) setzen を比較してみる時，動詞の持つ機能的役割が明瞭になる。sein の zustandhaft な役割に対し，kommen は inchoativ（起動的）働きを強調し，bringen の結果を示す。

即ち bringen は inchoativ と同時に kausativ（作因的）働きをも持つ。geraten は「自由意志によらない」「不本意な」瞬間と結びつくことで kommen の表現し得ない領域を持ち，sich in Bewegung setzen は極めて強い inchoativ として「突発の最初の一瞬のみを表現する」とする説すらある[4)]。bleiben は sein の durativ（継続的）表現であり，halten は同じく bringen の durativ な表現，といった具合である。

これ等の働きは，一方では名詞化してその特性の一部を失った動詞的名詞，即ち時称，話法，格支配，動作態様，相（Aspekt）等を失った動詞を，他の動詞によって回復させていることになる。又他方では，ドイツ語の動詞体系において欠けるか或は不充分な機能を，名詞転換語法の動詞によって新らたに創り出してもいるわけである。Weisgerber が指摘している様に，ドイツ語での動作態様や相は，もはや動詞の形態体系に注目するばかりでなく，全言語構成を検討してその解明に達しなければならないのである。名詞転換語法も，この場合一つの役割を演じ得ることは，最近 T. Frank が記している通りである。「周知の如くドイツ語での動詞相の存在が論議されている。しかし乍ら，相はたとえこの様な（名詞転換）語法の形においてであろうと，表現され得るものであることがわかる。」

Die geistige Leistung という項目は，既述の通り本論八章の各章にあるが，ここでは主語の Befindlichkeit を述べる Nische が検討されている第一章を紹介するにとどめる。これによって geistige Leistung の研究というものが如何なる性質と内容を持ち，言語研究上にどの様な意義を持っているかを窺い知ることが出来よう。著者は他の箇所（S. 31）で『動

詞的領域における名詞的語法の使用を正当化すること，又この言語可能性が著しく活潑になるのを説明出来る様な，言語上の精神活動が存在するかどうかを確認すること，これ等がわれわれの本来の課題である。このためには，特に他の言語可能性との比較が重要であり，この場合では単一動詞又は形容詞との相違である。Rat geben では raten と何が異って表現されているか，Fähigkeiten zeigen と fähig sein では？ 等である。この場合，生活環境の精神的把握と形成の際に，著しく人間的な附加物が明らかになる。というのは，ここで問題となる「複合的」言語構造が，屢々単なる動詞か形容詞で置き換えられるような，それ自体としては「単一の」事象や事態を表現しているからである。事象が同じであろうと，それに関する発言 (Aussagen) は異っている。同分野に自由な動詞と名詞転換語法が併存することからこそ，名詞転換語法の本質的な働きが生じるのである。』と述べているが，この geistige Leistung を論じる項でも，先づ他の表現法との対比から始めている。Sein を主として「あり方」を述べる名詞転換語法は，次の様な対応から成ることが明らかになる。

単一動詞

fließen	=in Fluß sein
fahren	=in Fahrt sein

合成動詞

umlaufen	=in Umlauf sein
heranziehen	=im Anzug sein

再帰動詞

sich bewegen	=in Bewegung sein
sich zurückziehen	=im Rückzug sein

形 容 詞

ängst-lich sein	=in Angst sein

auf-geregt sein	=in Aufregung sein
ver-legen sein	=in Verlegenheit sein
fassungs-los sein	=ohne Fassung sein

分　詞

hoffend	=in Hoffnung sein
verlangend	=voll Verlangen sein
zu etwas hinneigend	=Neigung haben

受　動

er ist benachrichtigt	=hat Nachricht
wird angewiesen	=bekommt od. erhalt Anweisung
wird kontrolliert	=steht unter Kontrolle
wird bearbeitet	=ist in Arbeit

この様に動詞表現が多様な形態をとるに対して，名詞転換語法では一定した型にはめられる。即ち

（前置詞＋）状態＋動詞

であり，扱いが遙かに簡単であるという利点を持っている。これは専門語にとって非常な重要さを持つ。人間の共同生活が定められた秩序を要求する所では，何処であっても，機構・行政・組織・法機関なしには秩序の実現は不可能である。この様な総てのメカニズムが滞りなく機能を発揮するためには，厳密に固定された事務の進行が必要となる。今日の行政組織が綿密に組み立てられていればいる程，又それが多岐に分れていればいる程 Th. Steche のいう“Zwecksprachen”のどれにも，厳密な区別をする言葉 (Wortgut)，差違をつけ，固定し，規定する語法への要求は益々大きくなるのである。

そこで例えば，或人が ein Amt を antreten するのか，übernehmen, üben, ausüben, verwalten, bekleiden か，それとも die Amtsgeschäfte

führen なのか，ということが重要になってくる。これに対して動詞の分野では，僅かに amtieren という外来語に頼るしかない有様である。

図式化した名詞転換語法の中には，W. Havers の名付けた「力を省く努力」の様なものが見出される。この場合彼は，多くの言語に見られる安易な画一化を指しているのであるが，R. Hildebrand の様に，「ますます性急になりつつある思考や発言の妨げとなるような，伝統的な多くの形式から抜け出て，より以上の簡単さに達しようとする，遙か古来からの努力が表れたもの」として名詞転換語法を観る方が妥当である。そうなると，世に Verbalaufschwemmung とか Anfblähung とか名付けているのとは，まさに反対のことが達成されることになる。この様な，図式化による簡略化は第八章の受動代用としての Nische にも明らかに見ることが出来る。例えば finden による転換語法では，動詞表現による多様さと比し，実に簡単明瞭な一つの型しかない。

er wurde bewundert…gewürdigt	er hat Bewunderung…Würdigung	GEFUNDEN
ihm wurde geglaubt…vertraut	er hat Glauben…Vertrauen	GEFUNDEN
man glaubte…vertraute ihm	er hat Glauben…Vertrauen	GEFUNDEN
er gefiel	er hat Gefallen	GEFUNDEN
er wurde aufmerksam behandelt	er hat aufmerksame Behandlung	GEFUNDEN

のみならず，元来ドイツ語では不可能な筈の，人につく受動 (persönliches Passiv) を，名詞転換語法を用いて表現することすら可能となる。in Verfall geraten, einen Zusammenbruch erleiden, eine Niederlage erfahren, Gefallen finden, zur Explosion kommen 等に見られる内容は，他動詞の受動に匹敵するものである。

次に文体上・文章論上，名詞転換語法の果す役割も見逃がすことが出来ない。文章論的立場から観ると，名詞転換語法は二分肢述語であり，文中での括弧能力（Klammerfähigkeit）をその特性と見做すことが出来る。即ち相関連する名詞部分と動詞部分が，文中の前後に分れて或種の緊張を生み出す。これが極端に用いられると，文を難解で不明瞭なものにしてしまうため，屢々批評家の槍玉に上げられる。例えば新聞からの例として，

Hierauf *setzte* sich der große von Hofwagen und zahllosen anderen Wagen und Offizieren gefolgte Trauerzug unter den Klägen des vom Trompetenkorps des Garde-Kürassier-Regiment geblasenen Chorals durch die von Tausenden besetzte Bellevuestraße und Siegesallee über den Königsplatz nach dem Hamburger Bahnhofe *in Bewegung*.

しかし逆に名詞転換語法を用いてこそ，文を見通し良く明瞭に形造る可能性も与えられているのである。名詞転換語法の名詞は，屢々文の初めにも立つことが出来る。この点に文章論の領域における名詞転換語法の重要な働きが潜んでいる。即ち名詞を先頭に置くことによって，文の主要な発言部（元来動詞による述語部）が直ちに見分けられるからである。これによって文は概観し易くなる。括弧能力或は動詞の後置と結びついている，ドイツ語構文の不明瞭さに対し，これによってわれわれに有力な対抗手段が与えられるのである。H. Moser の表現を借りれば，「ドイツ語で文末に動詞を置くことは，文全体への見通しを困難にしている。ところが名詞化によって動詞内容が先にとり出され，文末の動詞は助動詞の機能しか持たなくなる。次の様な例を比較してみるとよい。」[5)]

Man muß nun die neue Verordnung, auf die wir schon lange gewartet haben, durchführen. Man müß die Durchführung der Verordnung……vornehmen.

或は

Wir bitten Sie, das Fernsprechbuch, das schon lange für Sie bereitliegt, nun abholen zu lassen.
Wir bitten Sie, die Abholung des Fernsprechbuchs……nun vornehmen zu lassen.

更に，名詞転換語法の利用と結びつく重要な可能性として，発言を狭い場所に結集し，凝縮することが挙げられる。先程の新聞記事は，あまりに多くを盛り込もうと欲張り過ぎて失敗した例であるが，Kleist は最も巧みに転換語法の性質を利用した一人であるといえる。

"Einen so heillosen *Ausgang nahm* der wohlgemeinte und redliche Versuch, dem Roßhändler wegen des *Unrechts*, das man ihm *zugefügte*, *Genugtuung* zu *verschaffen*." (Kleist : Michael Kohlhaas S. 66)

1. 人々は馬商人に不当な仕打をした。
2. そこで彼の名誉回復を試みた。
3. その試みは善意で誠実なものであったが，ひどい結果に結ってしまった。

ざっと以上の内容が，この短い文章にすべて織り込まれてある。文章の技術もさること乍ら，それを可能としたのは名詞転換語法の存在に他ならない。

別の特徴ある文例を挙げると，

Man suchte die *Einflüsse*, die sie *erfuhren* und *ausübten*, klar zu legen. (C. v. Kraus)

ここでは，二つのまるきり異った内容が，転換語法によって結ばれている。Einflüsse erfahren は beeinflußt werden で受動，従って他からの働きであるに対し，Einflüsse ausüben は beeinflußen で能動，他への働きである。これを仮に動詞で表現した時と比較してみれば，名詞転換語法の持つ結集力（Raffung und Ballung と呼ばれる）が容易に理解され

るのである。

次に名詞転換語法の名詞部分が形容詞を附加することによって，更に詳しく規定され得るということも，文章論的に大きな働きである。これに反し，単動詞は副詞的規定しか持ち得ないし，それが現れるのも文末である。O. Jespersen は "Philosophy of Grammar" で，文肢を重要度に応じて三段階に分けた。それによると，副詞は最も低く重要度Ⅲ，動詞はⅡであるに対し，名詞はⅠとされている。すると名詞化によって動詞はⅠの段階に上り，副詞はこれに従って形容詞となりⅡに上るわけである。これは副詞の働きが，瞬間的な個々の出来事に限られているに対し，形容詞は本質的なものを示す，という点からも当然であると思われる。etwas verwundert feststellen では副詞が行為に繋っているが，eine verwunderliche Feststellung machen では形容詞は Feststellung 自体の本質と結果を示すことになる。さて Leben führen の様に，成語化し，内容が空疎になった結び付きでも，形容詞が加わって来ると，再び独自の表現力を持つようになる。

Goethe の用いている例だけでも，

ein fremdes Leben führen
ein dummes Leben führen
ein sehr einfaches Leben führen
ein vergnügliches und genußreiches Leben führen
ein zwar mäßiges, aber doch sorgloses Leben führen
ein gemeinsames Reiseleben führen

の様に，種々の形が見られる。

次に文のリズムという観点からすると，名詞転換語法は，文章をフォルテで重々しく響かせるために利用されている。Er druckte ihm sein Beileid aus. と Er *brachte* ihm sein *Beiled zum Ansdruck.* の相違は

明らかである。特に文末を強く響かせることは大きな効果があることを，Behaghel や A. Bach も認めている。これを意識的に用いた作家に E. Jünger がある。E. Lachmann が Jünger の "Marmorklippen" の言葉を分析した研究によると，この作家は強いアクセントのある綴で文を終らせるのを好み，屢々動詞の前綴を文末に置く傾向がある。同じ理由から名詞転換語法がそのために多用されている。

"…und *halten* die lüsternen Vögel *in Schach*" (S. 7)

"…und *hielten* närrischen *Rat* und *Gericht*" (S. 11)

"Wir *hegten* vor diesen Tieren, die zahlreich in den Klüften und Schrunden der Rauten-Klause hausten, keine *Furcht*" (S. 13)

"Bei diesen *kam* uns die Legion der stummen, in Leder oder Pergament geschnürten Sklaven gut *zupass*" (S. 18)

"Dergleichen Höhlen *boten* in alten Zeiten den Hirten *Schutz* und *Unterkunft*…" (S. 20)

文体論的な研究は現在の処，未だ殆んど開発されていないが，大凡次の様な効果を計算して用いられている例が多い。

1. 名詞転換語法の持つ Klammerfähigkeit を利用し，緊張を要求するような文体に好んで用いられる。哲学書の場合は思考上の関連を持続させるために，又文学の場合は文の形においても，読者の精神状態にも，張りとアクセントをもたらす。

2. この語法の持つ硬さと理屈っぽさを，或る人物に語らせることによって，その人物を様式化しようとする試みは，Bergengruen 等の作品に見られる。(特に彼の "Der Großtyrann und das Gerlcht")

3. 尊大に響くこの語法を，日常のありふれた出来事に使用することによって，そのアンバランスが滑稽な比喩やイロニーを生む。

例えば ein Hund *macht* sparsamen *Gebrauch* von seiner Stimme (Th. Mann, Herr und Hund), ein Nachbar *steht* mit seinem Grinsen

zur Verfügung (Kafka, Prozeß)

K. Daniels の研究は，名詞化傾向という現実から，数多くの問題をとらえた。しかもその多くは問題として提出されたままである。Weisgerber 理論による新しいドイツ語研究は漸くここに発進を始めたということが出来る。

註1) 第六輯　関西学院大学文学部独文科研究室年報　Ⅵ　1963「名詞化現象の現代ドイツ語構文に及ぼした影響」

2) この訳語を便宜上こゝで用いることにしたが，広義に解すれば，名詞部が元来からの名詞であり「転換」でない場合も往々にしてある。しかし原語の Umschreibung も，これを承知の用語であり，寧ろ他の語法，即ち単動詞による表現も可能である所に，今一つの表現の可能性を用いるという意味で Um- や「転換」が解せられるべきであろう。

3) Weisgerber の言語学理論又は言語哲学には，多くの新しい概念が用いられており，Nische, Feld, Zugriff 等，就れも彼の理論体系を理解することなしには，訳語を造っても無意味である。言語と人間生活が相互に規定し合うという原則，言語は世界を精神の所有する方途であるという観点，などから言語の持つ Energeia という概念が生れる。具体的には，続いて挙げてある「言語研究の四領域」がその方法論といえる。

4) T. Matthias, Sprachleben und Sprachschaden, S. 269.

5) H. Moser, Entwicklungstendenzen des heutigen Dentsch, S. 97.
H. Moser は Maurer-Stroh 編の "Deutsche Wortgeschichte" の中で Neuere und neueste Zeit の部分を担当しており，現代語の研究者であるが，純客観的な言語研究者であり，引用の部分も名詞転換語法の弁護ではなく，客体としての観察である。

——関西学院大学文学部教授——